

進んで心から献げる喜び

[聖書] 出エジプト記 35章 20~29節

イスラエルの人々の共同体全体はモーセの前を去った。心動かされ、進んで心からする者は皆、臨在の幕屋の仕事とすべての作業、および祭服などに用いるために、主への献納物を携えて来た。進んで心からする者は皆、男も女も次々と襟留め、耳輪、指輪、首飾り、およびすべての金の飾りを携えて来て、みな金の献納物として主にささげた。青、紫、緋色の毛糸、亜麻糸、山羊の毛、赤く染めた雄羊の毛皮、およびじゅごんの皮を持っている者も皆、それを携えて来た。銀や青銅を献納物としようとする者は皆、それを主への献納物として携えて来た。また、アカシヤ材を持っている者は皆、奉仕の仕事のためにそれを携えて来た。心に知恵を持つ女は皆、自分の手で紡ぎ、紡いだ青、紫、緋色の毛糸および亜麻糸を携えて来た。心動かされ、知恵に満ちた女たちは皆、山羊の毛を紡いだ。指導者たちはエフォドや胸当てにはめ込むラピス・ラズリやその他の宝石類、香料、灯油、聖別の油、および香草の香を携えて来た。モーセを通じて主が行うようお命じになったすべての仕事のために、進んで心からするイスラエルの人々は、男も女も皆、随意の献げ物を主に携えて来た。

[序] 教会総会に当り

今日は礼拝後に2009年度の教会定期総会を行ないます。今月末で終わる2008年度の歩みがどうだったのかを、改めて一つ一つ振り返ります。そして今年は更にこうしてはと考え合い、新しい思いをもって4月から始まる2009年度の歩みの備えをいたします。

使徒パウロはこう言いました。「あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその部分です」(Iコリント12:27)。私たちの体は数多くの部分の集合体ですが、どの部分も無くてはならぬ働きをして体全体に貢献しています。教会もそれと同じで、誰一人として、不必要な教会員などいません。それぞれの個性と働きが集まって、川越教会を形成しているのです。教会の主であるイエス・キリストが私たち川越教会に期待しておられる御心をたずねながら、2009年度の歩みをご相談いたしましょう。

今日の聖書教育の学びは、イスラエルの民が神の幕屋を建設した時の様子が記されています。心動かされ、進んでささげようとする者が次々と献納物を持って来たので、十分で有り余るほどになりました。羨ましいですね。教会の定期総会当日に相応しい聖書の箇所です。神さまの私たちへの語りかけを聞き取って参りましょう。

[1] 赦された喜び

神さまと私たちとは、神さまが語りかける言葉によって結ばれています。イスラエルの民はモーセを通して語りかけられる神さまのみ言葉に一つ一つ聞き従うことによって、エジプトから救い出され、約束の地カナン目指して旅を続けるようになりました。神さまは神の民としての生活指針「十戒」を授けるために、モーセをシナイ山に呼び出されました。

ところがモーセがシナイ山の頂に40日間留まっているうちに、民はモーセが行方不明になったと不安に駆られて、金の子牛を造り、神さまが彼らと共にいて下さるしるしとして、担いでカナンの地に向かおうとしました。これは「いかなる像も造ってはならない」という第二の戒めの違反です。神さまは民との契約を破棄し

て、彼らを滅ぼし尽くすと激しくお怒りになりました。

モーセが行方不明になったのなら、どうしてモーセに代わる預言者を与えて下さいと、神さまに願わなかったのでしょうか。預言者を通して言葉を聞くだけでは、何とも心もとなくなってきたのです。神さまが自分たちの間に居て下さるといことが、一目見れば分かる形で現されれば、安心出来ると思うようになって来たのです。

しかし金の子牛はものを言いません。畑のかかしと同じです。ですから担ぎ手が次第にしゃべり始めます。聞き従うよりも、ああしましょう、こうしましょうと、金の子牛を自分たちの都合の良いように動かすようになってしまいます。神さまとの関係が転倒して、人間が主になり、神が僕になっていきます。罪深い人間が神さまを召使にして、我欲を満たそうとしたら、自滅します。ですから神さまは断固として、NO！とおっしゃったのでした。

モーセは懸命に執り成しの祈り捧げ、懇願しました。神さまは、では滅ぼすことはしないが、これ以上彼らと共に進むことはしないとおっしゃいました。神さまに見放されたら、たちどころに敵の餌食になってしまうでしょう。民は自分たちの犯した罪の重大さを思い知らされ、嘆き悲しみ、装身具の一切を取り外して喪に服しました。

神さまは遂に御心を翻し、モーセを再びシナイ山頂に召し、赦しの言葉と共に、契約を結び直してくださいました。そして改めて十戒を石の板に記して、モーセにお渡しになりました。また前回同様に、その石の板を安置する幕屋を造るようと、モーセにお命じになりました。モーセはイスラエルの共同体全体に告げました。「あなたたちの持ち物のうちから、主のもとに献納物を持って来なさい。すべて進んで心からささげようとする者は、それを主への献納物として携えなさい」。

心動かされた人々は、臨在の幕屋と全ての備品、また大祭司や祭司たち及び職員たちの衣服・祭服等のすべてに用いるために、主への献納物を次々と、進んで心から携えて集まって来ました。聖所建設の作業が開始されても、人々はなお毎朝、随意の献げ物を携えて来るので、作業全体を仕上げるのに、十分に有り余るほどになったのでした。金の子牛を造ってその前で飲み食いして踊り回った民の、この変りようには、大いに驚かされます。一体どうしたことでしょうか。

それはあれほど激しく怒られた神さまが、彼らを赦して下さったからに他なりません。モーセに向かってはっきりと宣言して下さいました。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者」。

私たちの罪は自分一代では終わらず、その悪影響は3代4代にまで及ぶとは、何という恐ろしいことでしょう。罪を軽々しく犯すことはできません。悪と真剣に戦い、正しく生きようと必死にならなければなりません。それでも私たちは、罪を犯してしまう弱さを抱く者です。しかし神さまは、罪を問う前に、罪と背きと過ちを幾千代にもわたって赦すと、忍耐強い憐れみと慈しみの豊かさを宣言下さいました。そして彼らをご自分の民とする契約を、結び直して下さいました。「幕屋を造れ、貴方たちのただ中に住もう」とお命じになって

下さったのです。何と言う有難いことでしょうか。彼らは全身に溢れる喜びをもって、幕屋建設に応答したのです。

[2] 私のただ中に居て下さる神さま

モーセが命じられた聖所は、旅を続ける彼らと共に移動できるように、特別に作られた幕をつなぎ合わせた幅 4.5m、奥行 13.5m、高さ 4.5m ほどのテントですから、幕屋と呼ばれました。中は二つに仕切られていて、奥に神の言葉が記された石の板を収めた契約の箱が置かれている至聖所、前方が聖所で机と祭壇、金の燭台が置かれています。聖所の外の正面に、洗盤と捧げ物を焼き尽くす台が置かれています。そして周囲を幅 22.5m、奥行 45m の幔幕(マンマク)で囲みます。

幕屋の中心は至聖所の契約の箱で、中に十戒の記された石の板が収められています。そして契約の箱の蓋が贖いの座と呼ばれ、その座の上から神さまはモーセに臨み、民に命じることをことごとくお語りになるのです(25:22)。それまでモーセを高い山の頂に呼んでみ言葉を語り、与えておられた神さまが、民の宿営地のただ中の幕屋に臨んで下さり、いつでもモーセに会い、み言葉をお与えになることになったのでした。

彼らが荒れ野を移動する時には、レビ族が契約の箱をはじめ幕屋の一切を持ち運び、宿営すれば、直ちに幕屋を組み立てて、神さまのみ言葉をいつでも聞く用意を整えたのでした。イスラエルの民が進む所には、彼らのただ中に主なる神さまがいつも居て下さり、み言葉をもって導いて下さるようになったのでした。

イギリス人と結婚したホームズ恵子さんは、日本軍の捕虜になって酷い扱いを受けたイギリス人の退役軍人及びその家族と日本人との和解の働きを20年来続けてこられた方です。彼女の生まれ育った三重県紀和町には、シンガポールから連れられて来たイギリス兵の捕虜300人が働かされた銅山がありました。彼らは捕虜残酷物語で悪名高いタイからビルマへの鉄道建設工事の生き残りでした。この銅山は日本人の労働者や動員された中学生たちも働いていたので、タイ・ビルマ鉄道工事とは違い、人道的な扱いをしたようですが、それでも16人が死にました。村人たちは彼らを、木の十字架を立てた墓に葬りました。

ホームズ夫人が1988年に久し振りにイギリスから里帰りすると、その墓の十字架が大理石の墓石に改装され、16人の名前を刻んだ記念碑まで建っていました。銅山がつぶれて 過疎化した貧しい村なのに、このようにお墓を守っている村人の心に、恵子さんは感動しました、そしてこれを捕虜だった人たちとその家族に知らせたいという熱い思いに駆られました。神さまに祈り続けていると、元捕虜だった一人と連絡がとれ、それがきっかけとなり、元捕虜たちと、一緒に働いた中学生や紀和町の人たちとの文通が始まりました。ホームズ夫人はその交流を日英両文に訳し、写真をそえて小さな本「片隅に咲く小さな英国」にしました。そして捕虜だった人々を訪ねて配り始めました。

1991年10月ロンドンで開かれた極東捕虜協会の大会に、彼女は出かけて行きました。「日本人に用はない、帰れ」と怒鳴られました。本や写真を見せて懸命に説明し、やっと中に入れてもらいました。1000人の会場は日本軍に痛めつけられた人々の憎しみと恨みが渦巻いていました。戦争が終って46年経つのに、戦争の傷がいまなお痛みと苦しみをもたらしているのです。彼女は募金活動をして、28人の元捕虜を中

心としたグループが日本を訪れる計画を実現させました。村人が大事に守ってきた墓と記念碑を前にして、彼らの憎しみと恨みは溶け、赦しと和解の心が与えられました。これは何よりも彼ら自身の心と体に癒しと平安をもたらしました。この癒しを仲間皆に分けなければと、それから毎年日本を訪れる和解の旅が続けられました。ホームズ夫人は、現在アジア全域で元捕虜との和解の働きを続けておられます。

[結] Let's Go, Keiko !

「日本人に用はない。帰れ」と怒鳴る元捕虜たち。憎しみと恨みが渦巻く1000人の会場に、彼女はよくも入って行けたものです。「Let's Go, Keiko !」というお声を聞いたから」と説明しておられました。“Go, Keiko !”「恵子、行きなさい」ではないのです。“Let's Go, Keiko !”「さあ恵子、一緒に行こう！」なのです。これこそ彼女の中にいて下さる神さまのお声です。「神さまと一緒に行って下さるのですから、恐れも不安もありませんでした」。

憎しみや敵意はその人自身の心と体から平安を奪い、傷つけますが、赦しと和解が癒しをもたらします。これこそが神さまの救いのみ業です。神さまはホームズ夫人の内に住んで下さって、彼女を内側から励まし、支えて、この救いの業をおさせになりました。神さまが その人の生活のただ中に宿ってくださるならば、誰でもが同じ恵みにあずかれるのです。ですから神さまは、イスラエルの民の中に幕屋を造らせて、彼らと共にいて下さろうとなさったのでした。

神さまは私たち小さな教会に、素敵な幕屋を造らせて下さいました。私はこの礼拝堂がすっかり好きになりました。この建物がもっと駅に近ければと、それだけが難点ですが、でもこの会堂で礼拝を守れますことを、いつも心から感謝しています。このような罪深い者ですのに、赦して下さり、私の中に住み、共に進んで下さる神さまの恵みを、礼拝を守るたびに新にします。“Let's Go, Toru !” 何と言う嬉しい呼びかけでしょうか。神さまのこの呼びかけを、皆さんもお聞きになっておられることでしょうか。私たちも、喜びに心を動かれ、神さまのご用のために、進んで心から自分を献げて参りましょう。

完